

Re:ゼロから始める奇妙な冒険～ニュースターダストクルセイダース～

かじもこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DIOとの決戦中に気を失い、目を覚ましたら異世界に居た承太郎達。異世界にて新たな仲間と共に現実へ帰るための奇妙な冒険が始まる。

目次

第1章 王都の1日編

1話	新たな世界の闇	その1	1
2話	新たな世界の闇	その2	7

第1章 王都の1日編

1話 新たな世界の闇 その1

承太郎はふと目が覚める。

しかし、その瞬間気を失っていた自分に驚く。つい数分前までDIOと死闘を繰り広げていたにもかかわらず気を失っていたのだから。ましてやDIOの前で気を失うなど、殺してくれと言っているのも同然だった。

承太郎は体を起こし霞む目を擦りながら周りを見渡す。すると周りに祖父のジョセフ・ジョースター、そしてポルナレフが倒れているのが確認できた。

しかし、その後それ以上に衝撃的な光景が目に入る。自分達が横たわっていた街並みは、どう見てもさっきまでいたエジプトのカイロではなかった。中世ヨーロッパ風の街並みであった。

街行く人々も猫耳や尻尾があったり、馬車を引くのが馬ではなくトカゲのような生き物だったり、明らかに様子がおかしかった。

承太郎は、近くに倒れていたジョセフを揺さぶり声をかけた。ジョセフはDIOとの戦いで体の血をほとんど吸われ重傷を負っていたはずなので、外見上怪我がないとはいえ最悪の結果が頭をよぎった。

「おいじじい！じじい！目を覚ましやがれ！」

承太郎の心配とは裏腹にジョセフは揺さぶるとすぐに目を覚ました。

「・・・なんじや承太郎。ってあれ!?わしの傷が治ってる！承太郎！傷を治してくれたのか？」

「そんな事はどうでもいい！周りを見やがれ！」

そんな承太郎の騒ぎ声を聞いて、ジョセフの隣に倒れていたポルナレフも目を覚ます。

「なんだ騒がしいな・・・ってあれ？傷が治ってやがる！いや、そもそもいこごこだ!？」

見慣れない場所に驚き飛び起きたポルナレフ見てジョセフも体を

起こしたが、3人とも現状が呑み込めず周囲を見渡していた。

しかし、このままではちが明かないので、二手に分かれて情報を集める事にした。承太郎は近くを歩いていた人に聞き込みをし、ポルナレフとジョセフは周辺を歩き回った。

ジョセフとポルナレフは近くの商店街を歩き回っていたがやはり何度見てもこれまで見てきたエジプトとは考えられなかった。

「ポルナレフ、わしはどう見てもエジプトのカイロには見えんのじやが、病気にでもなったんじやろうか？」

「ジョースターさん、そんなら俺も病気になったらしい。景色だけじゃなくて動物とかトカゲみたいな人間も見えやがるぜ」

周囲を歩く人々は騎士風の人、人間ではない亞人とも言える人々が往来していた。しかし、商店街を見渡していると見慣れたものがジョセフとポルナレフの目に入った。

「ジョースターさん！あれは！」

「ああ、あれはどう見てもリンゴじゃー！」

ポルナレフとジョセフの目に入った店は、リンゴだけでなく見慣れた果物が多数置かれていた。ポルナレフとジョセフは果物屋に駆け寄ると店主と思われるものが出てきた。

「あんたら旅の者かい？これはリンガだ」

試しに買ってみようと思ったジョセフであったがこの国のお金を持っていないことを思い出し、ポルナレフと相談していると、店主が詰め寄ってきた。

「その様子、もしかして文無しか？だったら出てけ！商売の邪魔だー！」

一瞬のうちに二人は追い出されてしまった。何がなんやら混乱していた2人だったがちようどそこへ、聞き込みをしていた承太郎も合流し、お互いの情報を交換した。

「どうやら、ここはルグニカという国らしい。エジプトでも日本でもヨーロッパでもない」

「つまりわしらは、違う世界とやらに来てしまったらしいな」

「違う世界!?!そんな事があり得るのか？」

「その前に場所を変えようか、承太郎、ポルナレフ。ここは目立ちすぎ

る。」

異世界に来てしまったという現実には、焦りすぎてしまい周りが見えていなかったが、見慣れない服装、ましてや高身長の人組の男であることから、承太郎たちはかなり目立っていた。

ひとまず3人は裏路地の階段に座り、話し合うことにした。

「じい、異世界となるとこれからどうする？」

「分からん。だが少なくともひとつだけ確かなことがある」

「ああ、D I Oもこの世界に居るって事か」

「そうなのか承太郎！」

「むしろはD I Oの乗っ取った祖父のジョナサン・ジョースターの肉体を通じて何か感じ取るものがあるが、この世界にでもなぜか奴の気配を感じる」

ジョースター家の体には不思議な力があり、血の繋がった存在を感じる事ができる。現実の世界でもこの影響でD I Oの存在を感じ取っていた。

「しかしエジプトの時よりも何かドス黒いものを感じるぜ」

「それはD I Oがなんらかの力で俺たちをこの世界に連れ込んだって事か!？」

「そうだと思うが、記憶が曖昧で思い出せないんだ」

D I Oとの決戦の中、ジョセフは重傷を負い、ポルナレフも負傷し気を失っていた。そのため、最後まで戦闘をしていたのは承太郎のみだが、最後の記憶が曖昧だったためD I Oがどのような能力を使ったのか思い出すことが出来なかった。

承太郎は思い出そうとするが、何かモヤがかかっているように思い出せない。そんな様子を見かねてジョセフが声を掛ける。

「承太郎、無理をするな。じゃが、おそらくD I Oの影響で間違いないじやろう。でなければ、むしろがここに居る理由の検討がつかん」

D I Oの影響で異世界に来てしまったと言う結果は出たが、考えれば考えるほど絶望的な状況が浮かんできた。そう、金銭面の問題は一向に解決していなかったのだ。

「しかし困ったことになったな、右も左もわからんこの世界でD I O

を探して元の世界に戻らないとな。しかもSPW財団の支援は無しだ」

SPW財団、それはかつてのジョセフの親代わりであったスピードワゴンが設立した財団で、現実世界でも承太郎一行を金銭面やその他多くのサポートをしていた。

しかし、ここは異世界であるためそのサポートも絶望的であった。再び承太郎一行に絶望が広がる。

「それってつまり俺らは一文無しって事か!？」

あまりのショックに声を荒げるポルナレフだったが、そんな中、少女の大きな声が承太郎一行に響いた。

「おいそこのお前らー！じゃまー！」

声の正体である金髪の少女は、見た目からは考えられない素早さとジャンプ力で座り込んでいた承太郎一行の上飛び越えていった。

「うわっ、すげ〜」

金髪の少女に見惚れているポルナレフをよそに、承太郎とジョセフは今後について話し合いをしていた。

「やれやれ、ともかくじじい何か売れそうなものは無いのか？このままだと俺たちはDIOの思惑通りこの世界で飢え死にだ。」

「そうじゃなー、仕事さえ見つければどうにかなるんじゃないかな」

すると今度はチンピラ風の男3人組が現れた。

体格のいい男と細身の男と小さめな男であった。承太郎は内心勝手にトン、チン、カンと命名していた。

「おいそこのお前ら」

「珍しい服の奴らだな、旅人か？」

「痛い目見たくなければ出すものだしやが・・・」

トン、チン、カンは、遠近法の影響で承太郎一行があまり大きくなっていると思っていたが、そんな事はなかった。190センチ以上ある大男3人組を前にトン、チン、カンは固まってしまった。

「痛い目見たくなければなんじゃって？最近耳がちと遠くてな、もういっぺん言ってくれんかのー？」

怯んだ3人組にすかさずジョセフは煽りを入れる。流石はジョセ

フ・ジョースターである。

「くそ、こうなったら！」

細身のチンは大きなナイフを突き出し再び承太郎一行を脅しにかかった。

「おお、こいつナイフをだしやがった！どうするジョースターさん？」

「やむを得んな。承太郎、あまり騒ぎにならないな。」

「やれやれだぜ。」

承太郎は拳を鳴らしながらトン、チン、カンに迫った。

「おい、テメエら。本物の喧嘩つてのを教えてやる。かかって来な。」

承太郎は脅しも兼ねて、承太郎のスタンドであるスタープラチナを使い、ナイフをチンの手から払い除けた。

チンは、ナイフが手元から離れたことに驚いた様子だった。しかしその驚き方は普通ではなく違和感があった。まるでスタープラチナが『見えてよう』な様子だった。

「ナイフが!?!しかもそれは！おまえ、精霊使いだったのか!?!」

「てめえ、俺のスタープラチナが見えるのか？まあそれはどうでもいい。俺から金を取りたいんだろ、かかってきな」

「く、くそー覚えとけよー！」

承太郎の威圧に耐えられず、3人は一目散に反対側の路地へ逃げ出した。

「やれやれ、かかっても来ないで逃げるとは大した事ないやつじゃったなー！」

3人の鮮やかな逃げ方にジョセフは満足な状態だった。しかし、承太郎はチンの様子と言葉に引かっていた。

「スタンド」とは通常の間人には見えず、いわゆる特殊能力にしか見えないのである。また、スタンドはスタンドでしか倒せない。こんなルールがあるのだが、チンはスタープラチナを明らかに見えておりまた、「精霊」と言っていた。

明らかに違うこの世界。承太郎は一人思考を巡らせていると再び承太郎一行に声が響いた。

「そこまでよー！」

2度あることは3度あると言わんばかりのトラブルに3人とも頭を抱えてしまった。あまりのトラブルの多さにジヨセフは呆れながら声をかけた。

「今度は何じゃ」

承太郎一行の視線の先には、銀色の髪をし白色の衣服を着た少女が立っていた。

T o b e c o n t i n u e d ↓

2話 新たな世界の闇 その2

承太郎一行の前に現れた銀髪の少女は、険しい目つきのまま承太郎に迫った。

「貴方達！今なら許してあげる、私から盗んだ紀章を返して。あれは大切なものなの」

承太郎達は、彼女が何を言っているのか理解できなかった。当然だが、紀章などに心当たりは全くない。

そんな状況を見かねてか、ジョセフが少女に諭すように声を掛ける。

「悪いがお嬢さん。わしらはたまたまここに居ただけで、紀章とやらは見とらんよ。」

「そう、わかったわ」

ジョセフの話を聞いて納得したようで、少女は承太郎一行の横をすり抜けて路地の奥へと進んだ。これで大丈夫、とため息をついていたのも束の間、少し進んだところで少女は再び険しい表情で振り返り、承太郎達に声をかけた。

「そういえば、3人組の男が泣きながら走って行ったけど、あれはあなたたちの仕業なの？」

泣きながら立ち去る3人組と聞いて何秒か考えたが、心当たり無いこともなかった。おそらく先ほどのトン、チン、カンであることに間違いはなかった。

あれほどの威勢のよさだったのに見えなくなった瞬間泣きだしたのかと思えば承太郎一行は笑いが止まらなくなった。

承太郎たちに悪気はなかったが、笑っている様子を見て少女は怒ってしまったようで身構えていた。

「何を笑ってるの！やっぱりあなた達悪党ね！」

少女が叫ぶと周りに無数の氷の刃が現れた。それを見た瞬間、承太郎たちも切り替えて身構えた。次の瞬間、承太郎たち目掛けて氷の刃が飛んできた。

承太郎たちはスタンドを出して防御した。だが、ジョセフのスタンドは氷の刃を防ぐほどの力がないので承太郎がカバーした。

だが、その承太郎達がスタンドを出して防御している様子を見て少女は驚愕していた。

「え、あなた達も精霊使いなの!?!」

承太郎はさっきのトン、チン、カンの様子からスタンドが見えるというのは何となく予想はしていたが、「あなた達も」という言い回しに引っかかっていた。

「おい待ちな、あなたもという事はテメエ、精霊とやらを持つてるのか?」

「鋭いね君」

承太郎が問いただすと、少女の方から先ほどの声とは違う声が聞こえてきた。すると、少女の横に小さな猫のような生物が出てきた。だが、承太郎はその猫のような生物から、何とも言えない力を感じていた。

「やれやれ、やはりスタンドを持っていたのか」

「スタンドってのは知らないけど僕はパックだよ」

その小さな猫は、とても可愛らしい声で名乗った。

承太郎とジョセフは警戒していたが、見た目が猫のようでかわいこともあり、ポルナレフは警戒していない様子だった。

するとパックは諭すように、少女に話しかけた。

「リア、心配しなくても大丈夫だよ。この人達からは悪意を感じないから」

それを聞いても怪しむように承太郎達を見ていた少女だが、すかさずジョセフが話しかけた。

「笑ってしまつてすまんかった。さっきの逃げて行って3人組じやが、この承太郎に怯えて逃げ出した3人組じや。ただ、すまんがわしらは本当に迷つてここに来てしまっただけじゃよ。」

ジョセフはこいつに怯えたと、承太郎を指さしていた。それを見て少女は納得しているようだったが、承太郎はやれやれと、呆れている様子だった。

しかし、ここでやっと少女は自分の間違いに気づいた様子だった。「え、って事は私の勘違いだったの？」

少女が焦った様子でパツクに質問すると、笑顔でそうだとおなずき、承太郎達も無言でうなずいた。

「ごめんなさい！私の勘違いで……。紀章を取らて焦ってしまつて。」間違いに気が付いた少女が謝罪をし、これにて一件落着かに思えたが未だに承太郎一行は絶望的な状況には変わりは無かった。

しかし、そんな絶望感をよそにのん気にポルナレフは少女に対して話しかけていた。

「ま、誤解が解けて何よりだな。それよりも、その紀章とやらはそんなに大切なものなのか？」

「ええ、すごく大切なものなの！」

少女はそう答え、真剣な眼差しでポルナレフを見ていた。そしてポルナレフが若干赤面している状況を承太郎とジョセフは見逃していなかった。

だが、ジョセフもその紀章とやらが気になつていたので承太郎と話して、一緒に探すことにした。実のところ、異世界に来たとはいえ、このままでは野宿は確定的であり、もうエジプトでさんざんであつたのでついでに宿を探すのも主な理由ではあつたが。

「お嬢さん、わしらはあんたの紀章を探すのに協力したいが構わんかな」

「え、そんなきゆうに言われても、私何もお礼とかできないよ？」

少女は困惑していた。勝手に泥棒扱いをして攻撃までしてしまつたのになぜ紀章探しを手伝ってくれるのか理解できなかった。お礼も、手持ちのお金もほとんど持っていなかつたので何もできそうになかつた。

「かまわん、ただわしらは寢床を探しておつてな、もし紀章を見つけたら泊まれるところを紹介してくれんかのう？」

「なるほど、そのぐらいなら大丈夫よ。でも、どうやって見つけるの？」

するとジョセフは、少し待つように少女に言って足元の道路に砂を集めだした。少女は、何を始めるのか疑問に思つていたが次の瞬間、

ジョセフの腕から茨の植物のようなものが出てきた。

「これがわしのスタンド、いや、精霊じゃ。ハーミットパープル！」

ジョセフは自身のスタンドである『ハーミットパープル』を使い、道路に集めた砂に念写をした。するとこの街の地図、そして2箇所印が出てきた。

「このどちらかがわしらになるんじゃないが、お嬢さん、今の位置はどっちかわかるかのう?」

少女はジョセフの能力に啞然としてしまっていた。このような不思議な能力は、初めて見たからだ。だがそれもジョセフの掛け声ではっとする。

「た、多分この街並みからだところっちだと思う。」

「へえー、君の能力ってかなり便利なんだね。」

パックもジョセフの能力に感心していた。だが、ずっとパックと戯れていたポルナレフが我慢の限界のようで早く行きたいという顔をしていた。

「とにかく、この地図の方向に向かおうぜ！」

地図の方向に歩き出そうとした承太郎一行だったがパックの声掛けで立ち止まる。

「そういえばお互い自己紹介してなかったね」

自然と探索に向かおうとしていたが確かに承太郎達は名乗っていなかったし、少女の名前はまだ聞いていなかった。

「わしの名はジョセフ・ジョースターじゃ」

「空条承太郎だ」

「ジャン・ピエール・ポルナレフだ！よろしくな！」

承太郎達の自己紹介が終わるとパックがふわふわ飛びながら承太郎達に自己紹介した。

「僕の名前はパック！こんな見た目だけど本気を出したら世界を滅ぼしちゃうんだよ?」

その見た目の可愛さにポルナレフは完全に虜になっているそうで、パックと戯れていた。

「かー！すごいなく！こんな猫がねー」

「やめてよくすぐつたいよ〜」

楽しんでるポルナレフをよそにジョセフは少女に声をかけた。

「お嬢さん教えてもらってもいいかのう?」

「私は・・・」

少女はうつむいてしまった。よほど恥ずかしい名前なのかと承太郎達は考えていたが、数秒後顔を上げて答えた。

「サテラ」

「サテラねえ、いい名前じゃな!なあ承太郎!」

「ああ、これと言って普通の名前じゃーねえか」

ジョセフと承太郎は思っていたよりも普通の名前であったので、単に恥ずかしがっていただけと考えた。しかし、ポルナレフと戯れていたパックが急に少女へ寄り、ひっそりと話しかけた。

「趣味が悪いよ」

しかし、少女はそれを聞かなかったかのように承太郎達を向いて質問をした。

「それにしても貴方達、どうしてルグニカに来たの?」

「んー、話せば長くなるんじゃないが、家庭の事情という奴じゃ。」

「かていのじょう?」

「ああ、じゃが話せば長くなってしまいうからまた今度ゆっくり話そう」
承太郎達の旅の目的、それは承太郎の母であり、ジョセフの娘でもある空条ホリイを助けるため、そして原因であるDIOを倒すために冒険をしていた。だが、異世界に来てしまった以上、向こうの状況がどうなっているのか全く分からない状況だ。ましてや、この冒険で散っていった仲間たちの事を思うと、悔しい思いが込み上げてきた。
承太郎達は気持ちを切り替え、少女とともに紀章のありかを目指して向かっていた。パックは少女の首飾りの中へと入っていった。どうやらパックの家はその宝石の中らしい。

しばらく紀章を目指し、人通りの多い町の大通りを歩いていると、フードをかぶり、黒色の怪しいローブに身を包んだ女性にジョセフが急に声をかけられた。

「あら、貴方達は」

「なんじやお若いレディ」

ジョセフはローブ越しに謎の女性と目が合った。だが、なぜか初めて会う気がしなかった。まるで久しぶりに会うかのような感覚に襲われていた。

「いえ、なんでもないわ」

「やれやれ、変な女じゃったわい。」

謎の女性はそう告げると足早に去っていった。ジョセフは謎の汗をかいていたが、ポルナレフは興奮した様子だった。確かに声もよく、スタイルも抜群であった。

「それにしても綺麗な女性だったな！なあ承太郎」

「やれやれ、悪いが俺の趣味じゃあねーぜ」

先ほどの謎の女性について考え込んでいると、心配になったのか承太郎が声をかけてきた。少女も心配そうに奥から見ていた。

「どうしたじじい？」

「いや、気のせいかもしれないがあの雰囲気、以前どこかで会ったような・・・」

「気のせいだろう！先を急ごうぜ、ジョースターさん！」

確かに気のせいかもしれないがジョセフは得体のしれない不安に襲われていた。

To be continued↓